

プロ文革後の中国における日本文学研究の傾向

The progress of research in Japanese literature since the great proletarian cultural revolution in China

莫 邦 富*

With the establishment of the Society for Research in Japanese Literature in 1979, research in Japanese letters has made a fresh start. Since that time Chinese work in this field has flourished and has achieved outstanding results. In recent years there has been a growing tendency to introduce materials from Japan on a broad scale and to study them in an unrestricted fashion, and authors and works which had been considered taboo are now being studied more and more. One may now say that Japanese studies have become orthodox and not heretical. Scholars doing this research are now much younger and, unlike the past, they are in complete command of the Japanese language. Also, the dissemination of information has improved, and learned journals devoted to foreign literature have increased in number. The present period may truly be called the golden age of Japanese literary studies in China. With this, academic disputes about Japanese literature are increasing in intensity. Today Chinese

* Mo Bang-fu, 中国上海外国語学院講師

scholars in this field are cooperating to publish a *History of Japanese Literature* and also various kinds of dictionaries on this subject. We are all looking forward to a great advance in Japanese literary studies in China.

プロ文革前の中国でも、すでに日本文学研究はおこなわれ、ある程度の成果をおさめていましたが、長い間、日本との国交が正常化されなかったことや、政治運動の影響や、研究要員が足りなかったなどの原因で、満足できる成果があげられませんでした。例の悪名高い「プロ文革」の時代にはいると、インテリというインテリが全部徹底的にいじめられ、日本文学をもふくむ外国文学を研究することはできなくなってしまいました。プロ文革がおくるまで、偏った傾向がありましたが、少なくとも、日本の文学作品（例えば、徳永直、小林多喜二、宮本百合子などの代表作）の翻訳と出版はぼつぼつ行われていましたが、文革の動乱で、日本文学研究をふくむすべての学術研究活動が十年あまり停止していました。政治運動のため、むだにされたその十年をいまふりかえてみると、泣きたいほどくやしくて惜しかったと思われま

す。

やがて、プロ文革がおわり、正常な政治体制が再建され、学術研究活動の再開できるような機運も再び中国に訪れました。1978年、中国の南方にある広州で、「中国外国文学学会」の全国会議が開催されました（後に広州会議と呼ばれる）。この会議は、外国文学研究の雪解けを中国全土に知らせると同時に、各外国文学分野ごとに、その研究者の全国的討論会を開き、各外国文学の研究会を発足させることを決定しました。その決定をうけて、翌年の1979年9月、全中国第1回日本文学討論会が中国の東北にある長春市で開かれ（後に長春討論会と呼ばれる）、その会議で「中国・日本文学研究会」の結成が決まりました。長春討論会は、新中国誕生以来三十年、日本文学を論じる初めての国レベルの会議なので、中国日本文学研究者のパレードといわ

れるほど注目されました。そして、「中国・日本文学研究会」は全国的学術学会として、いっそう重要視され、その成立を「日本文学研究の里程標」とか「中国での日本文学研究の正真正銘のスタート」とまで評価されています。

中国・日本文学研究会は成立してから、全国の日本文学研究者を一丸にして、それまでの政治運動により出来た日本文学研究の空白をうずめ、他国の研究水準に追いつこうと全力をあげました。1979年以来、中国の日本文学研究はかなりの成果を収め、研究者も自信をもつようになってきました。しかし、長い間閉鎖的環境に置かれた中国日本文学界は、他国との交流がまだ足りなく、国際的場所で発言するチャンスも少なく、他国そして肝腎な日本からもいまだに十分に理解されていないと思います。現に、1981年訪日の際、ある座談会で「中国では、いまでも偏った日本文学研究しかされていません。つまり日本のプロレタリア作家のほかに、あまり紹介に力を入れていないようです」というある日本の大学教授の発言を聞いた時、私は驚きを感じると同時に、中日両国の文学研究分野での情報交換が十分でないという事実をも思い知らされました。ですから、今度のような国際的研究集会では、日本のある特定の作家あるいはある特定の作品に関する自分の論文を発表するよりも、日本および諸外国の関係者に中国日本文学研究事情を御理解いただくため、プロ文革後の中国における日本文学研究の傾向を紹介いたしたいと思います。主催者である日本国文学研究資料館の諸先生方が私の考えを理解し、発言の機会を作ってくださいましたことを心から感謝いたします。

私は、ちょうど1978年から日本文学研究に携わったものなので、現役の日本文学研究者として、自分の参加したことや見たことや感じたことをもとに、プロ文革後の中国における日本文学研究の傾向を諸先生方にご報告させていただきたいと思います。

1. 全面的紹介を求む傾向

1981年座談会で聞いたある大学教授の発言には、不服を感じると同時に、

一理あることも認めます。プロ文革までの中国での日本文学研究はたしかに偏った一面があり、日本のプロレタリア作家のほかに、あまり紹介、研究されませんでした。しかし、プロ文革がおわってから、こういう偏った研究現象がだんだん直され、全面的紹介を求める傾向が強くなってきました。

ここにいう全面的紹介は、いくつかの意味を含んでいます。

一つは、ある特定の作家あるいはある特定の流派やある特定の年代の作品だけを紹介するのではなくて、あるレベル以上あるいはある知名度以上の作家と流派を全部紹介しようとすることを意味します。

たとえば、1979年以来、近代文学分野では、坪内逍遙、二葉亭四迷、国木田独歩、徳田秋声、徳富蘆花、島崎藤村、樋口一葉、幸田露伴、尾崎紅葉、泉鏡花、夏目漱石、長塚節、木下尚江、田山花袋、森鷗外、武者小路実篤、志賀直哉、有島武郎、里見惇、長与善郎、芥川竜之介、菊池寛、久米正雄、川端康成、横光利一、谷崎潤一郎、山本有三、井伏鱒二、林芙美子、小林多喜二、葉山嘉樹、徳永直、高倉輝、宮島資夫、壺井栄、江口渙、中野重治、片岡鉄兵、佐多稲子、黒島伝治、宇野浩二、葛西善蔵、広津和郎、堀辰雄、尾崎一雄、永井竜男、舟橋聖一、今日出海、石川達三、丹羽文雄、中島敦、石坂洋次郎、田宮虎彦、野上弥生子、深沢七郎、太宰治、坂口安吾、織田作之助、正宗白鳥、佐藤春夫、阿部知二、梅崎春生、野間宏、大岡昇平、武田泰淳、堀田善衛、椎名麟三、伊藤整、原民喜、津村節子、平岩弓枝、芝木好子、安部公房、開高健、大江健三郎、井上靖、庄野潤三、曾野綾子、遠藤周作、三浦朱門、安岡章太郎、高橋和巳、水上勉、司馬遼太郎、新田次郎、城山三郎、有吉佐和子、山崎豊子、五木寛之、宮本輝、三浦哲郎、北杜夫、源氏鶏太、松本清張、森本誠一、星新一、小松左京などの純文学・大衆文学作家の作品が訳されました。とにかく日本の各文学全集に出ている作家のほとんどが紹介され、彼らの代表作品が中国で広く読まれています。以上は私の記憶によって整理されたものなので、漏れている作家がかなりいると思います。

全面的紹介のもう一つの意味は、物語や小説だけを紹介するのではなくて、和歌、俳句、詩、随筆、戯曲、評論、映画シナリオ、児童文学、民話、そして文学史などのジャンルをも含んだいわゆる広い意味での日本文学を紹介するということです。

柿本人麻呂、山上憶良、額田王、大伴旅人、山部赤人、雄略天皇などの歌人に代表される万葉集の歌や、松尾芭蕉、正岡子規、与謝蕪村などの俳人の作った俳句、短歌や、そして、たくさんの現代詩が翻訳され、中国の読者に読まれています。「日本俳句選」（湖南人民出版社）、「日本現代詩選」（青海人民出版社）はその一例です。また「日本散文選」（江蘇人民出版社）、「日本狂言選」（人民文学出版社）、「木下順二戯曲集」などのような作品集も出版されています。関係雑誌に散見される作品に至っては、枚挙にいとまありません。映画シナリオでは、「君の名は」、「古都」、「愛と死」、「野麦峠」など、たくさんの作品が訳されています。評論では、吉田精一、本多秋五、平野謙、中村真一郎、小田切秀雄、江藤淳、尾崎秀樹、桑原武夫、山本健吉などの評論家の作品が紹介されています。そして、西郷信綱の「日本文学史」や吉田精一の「現代日本文学史」も中国語に訳され、広く読まれています。児童文学・民話では、私の知っているかぎり、単行本だけでも三十点ぐらいあります。

以上の紹介を通して中国日本文学界では1979年以来、それまで見られた偏った紹介・研究の傾向を正常な方向へなおしている努力をご理解いただけたと思います。

2. 開放的紹介・研究を求める傾向

ご存知のように、中国では長い間外国文学紹介・研究を含む文学創作は、政治に乱暴に干渉され、正常な活動ができませんでした。しかし、こういう非正常の状態がやがて清算され、作家が創作の自由を獲得し、日本文学研究界でも、開放的紹介・研究を求める新しい風が吹き始めました。

文化専制時代の中国では、プロ文革を批判した外国の良識のある作家に「反中国」というレッテルをはりつけ、その紹介を許しませんでした。川端康成、石川達三そして第三の新人としてあざやかな活躍ぶりを見せた女流作家曾野綾子など、数多くの日本作家は、そういう目にあわされました。しかし、1979年からこういうタブーが打ち破られ、開放政策に支持されて、開放的紹介・研究が進められてきました。

例えば、1979年全中国第1回日本文学研究会では、川端康成についての論文が1点しかなかったのに対して、1982年山東省の済南市で開かれた日本文学討論会では、8点も提出され、ちょっとした「川端ブーム」でした。

石川達三、曾野綾子に対しても同じです。1979年から、「金環蝕」、「傷だらけの山河」、「人間の壁」、「風にそよぐ葦」など、石川達三の長編小説がつぎつぎと翻訳・出版され、曾野綾子の短編小説や短編小説集も出版され、その知的で繊細な格調が中国のインテリの中で人気を呼んでいます。私も曾野綾子の愛読者の一人です。

耽美派の永井荷風や谷崎潤一郎についての紹介も現れてきました。1982年創刊された季刊誌「日本文学」では、耽美派文学特集が生まれ、谷崎潤一郎などの耽美派作家の作品を訳載し、その文学的特色を紹介しました。

以上のような開放的紹介・研究を求める傾向に応じて、それまで内部刊行物として発行されていた研究機関の主催による外国文学専門誌も市販されるようになりました。たとえば、1979年創刊された「外国文学報道」は、上海社会科学院情報研究所の主催による雑誌で、主に外国文学に関する新しいインフォメーションを提供する情報誌ですが、最初は内部刊行物として発行されていたものなので、その雑誌に載せてもらった翻訳作品や論文などを外国の原作者や関係者に送ることができませんでした。やがて、こういう人為的矛盾を解消し、活発な学術研究を促進し、外国との交流を強めるため、「外国文学報道」のような内部刊行物は、あいついでおおやけに市販され、外国文学関係者でない一般の人々も購読できるようになりました。

3. 研究陣の構成に見られる変化

ほかの外国文学研究分野（例えば、ロシア文学・ソ連文学、フランス文学、イギリス文学、ドイツ語圏の文学など）と比べて、中国の日本文学研究陣は人数的にも、理論的にも、弱い存在でした。1978年の不完全な統計によると、多少日本文学と関係のある仕事をしている人を入れても、数十人しかいませんでした。実際、日本文学を研究している研究者はわずかに十数人でした。1979年日本文学を再出発させた当時の中国日本文学研究界は、十年の動乱によってできてしまった空白をうずめなければならない重い使命を背負っているばかりではなく、若い研究者を一日も早く養成し、老齢化の目立つ研究陣を若年化させなければならない急務にも追われていました。

数年間立ちました。「1982年日本文学討論会」が済南市で開かれた時、中国の日本文学研究陣は大きな発展を見せました。約2百人の研究者を代表している90人の出席者のうち、若手の研究者はかなりのパーセンテージを占め、その活躍ぶりも注目されました。北京を例にしましょう。1979年の長春討論会の時、出席した北京の研究者の平均年齢は53才でしたが、1982年済南討論会の時、なんと43.5歳まで下がってきました。

中国の日本文学研究陣の成長にもう一つの特色があることを注意していただきたいと思います。それまでの研究成果は、中国文学専攻の出身者や中国文学関係の研究者によるものがかなりありましたが、しかし、こういうタイプの研究者は、語学的関係で一次資料（すなわち日本語版の文学作品、評論、資料など）の利用ができないので、二次資料（すなわち中国語に訳された日本の文学作品、評論、資料など）をたよらざるをえなかった一面があります。こういう状態での研究は、視野が制限され、時間が余計にかかるなどの問題がさけられませんでした。

しかし、いまや中国日本文学研究会に入会している研究者は全員日本語ができます。それは二次資料を頼らないで、一次資料を利用して研究活動をすることができるのを意味しているばかりではなく、広い視野で研究対象を見

ることのできることをも意味しています。近年来、日本文学研究分野で、いろいろな研究成果があげられたこともその研究陣の構成の変化によるところが大きいと思います。

そして、いまの研究者には大学関係の人が多くことも特色の一つだと思えます。例えば、北京大学、吉林大学、東北師範大学、上海外国語学院などの大学は日本文学研究分野でかなりの実力をもっています。

もちろん、新しい問題も出ています。いまの研究者のほとんどは、日本語専攻の出身者であるので、日本語がわりと堪能ですが、文学研究に欠かせない理論的力のたりない一面があると思います。文学理論の研修とその向上は中国の日本文学研究者にとっては新しい急務になりました。

4. 論争が活発化する傾向

プロ文革までの中国では、外国文学専門誌が北京の「世界文学」（隔月刊）だけで、外国文学の出版が北京の人民文学出版社と上海訳文出版社に限定されていましたが、1978年からこの不合理的制限が廃止され、現在、「世界文学」のほかに、外国文学専門誌として、「外国文芸」（上海訳文出版社）、「訳林」（江蘇人民出版社）、「外国文学季刊」（外国文学出版社）、「春風訳叢」（沈陽春風文芸出版社）、「訳海」（広東人民出版社）そして大学の主催による外国文学誌など、外国文学評論誌として、「外国文学研究集刊」（中国社会科学院）、「外国文学研究」（湖北省外国文学学会）など、外国文学情報誌として、「外国文学報道」（上海社会科学院情報研究所）、「外国文学動態」（中国社会科学院）など、およそ50種ぐらいあります。さらに1982年吉林人民出版社では、日本文学を専ら紹介する季刊誌「日本文学」を創刊しました。中国文学関係の新聞・雑誌もそれらの外国文学専門誌に劣らぬ熱意で、日本文学の紹介に力を入れています。その典型的な例として、上海の「文学報」は1982年6月から「外国文学流派紹介」という欄を設け、「日本戦後派について」という文章でそのスタートをしました。

そして、言語関係の専門誌である「日本語学習と研究」も日本文学作品を訳載します。

中国の日本文学研究者は、傾向別あるいは地域別にこれらの雑誌や新聞にかたまって、おのおのの研究成果や翻訳作品を発表します。それまで目立たなかった日本文学研究分野では、急に活気にみちた新気運が現れ、そして当然なりゆきとして学術論争もだんだん活発化してきました。

創刊してまもなく、「日本語学習と研究」はその紙面で俳句と短歌の漢訳をめぐる、激しいと形容してもおかしくないほど活発な討論を行いました。そこに日本文学をよりよく、より正しく中国の読者に紹介しようとする中国日本文学者の意欲と熱意が見られると同時に、研究陣の構成の変化による新しい気象というものも感じることができます。この論争について、早稲田大学実藤恵秀元教授は次のように評価しています。

「（この論争は）まことにさかんなことです。日本では、漢詩を日本語に訳し（？）だして、1000年にもなりますが、「訳」といっても機械的に訓読するだけで、この中国の論争のように、「音楽美」とか、「構造美」とか、長短の問題などについて、このようにしんげんに、このようにこまかく論争されたことがあるでしょうか？、かえりみてはずかしいおもいがいたします。」

さらに、この論争のおこる原因について、実藤恵秀元教授は、「大胆に言えば、詩歌というものは、意味の大体はつたえることができますが、そのニオイ（香）までは訳しきれないのではないのでしょうか、それにしても、できるだけ意味も香も訳したい——そこで、こうした論争がおこるのではないのでしょうか」と述べました。

日本文学作品の中国訳をめぐる論争のほかに、川端康成とその代表作「雪国」についても、活発な論争が行われています。「雪国」をめぐる論争は、済南討論会で始められ、その後、討論会に提出された論文が「外国文学研究」や「日本文学」などの雑誌に発表され、一層活発なものになりました。

済南討論会の時、「雪国」に対する論点は、1. 「雪国」は川端康成の虚無的思想を表していながら、当時の社会の暗部をも屈折した形である程度反映している。2. 道徳的に墮落した男女のくだらない愛を語る「雪国」などの作品は、思想的にも、芸術的にも、全然取るに足らぬものである。3. 川端康成は次第に進歩的になってきた作家で、その代表作「雪国」も美しい女性像をうきぼりにした、すぐれた作品である、というふうに、分かれています。論争をすすめているうちに、川端文学および「雪国」などの作品の思想的傾向、芸術的特色、文学史的位置づけは、日本のその当時の思想意識の潮流、作者自身の人生観、時代および文壇の変化、文化の伝統などと切っても切り離せない関係をもっている以上、十分な研究をしたうえで、慎重に結論を出すべきだということに意見の一致を見せましたが、川端文学に見られる人間像や芸術的特色や創作方法などについてはその論争がいまだに続けられています。

そしてその論争そのものをめぐる研究も行われています。それは川端文学を研究する時用いられた文学理論や研究方法や論点をその研究対象とします。「日本文学」1985年第2号に発表された「近年らい国内における〈雪国〉の研究概観」（尚俠著）はその一例です。この論文は、「雪国」をめぐる中国国内の学術論争を綿密に分析してから、次のようにその論争を意義づけました。

「〈雪国〉についての研究と論争は、研究対象そのものに限るものとはかぎらない。近年来、作家論や作品論が盛んに行なわれることはまさに中国の現段階での日本文学研究のレベルを示したものであろう。（省略）これらの研究と論争は、中国の日本文学紹介・研究の歴史上、あまり見られなかった現象で……中国への日本文学の進出の新しい里程標となると同時に、中国における日本文学研究がさらに深まったことをも意味している。」

5. 着実に進む日本文学研究

日本文学とくに日本の近代文学あるいは戦後文学の研究を着実にすすめる前提はまず情報をしっかりつかむことです。1979年からあいついで生まれた数多くの外国文学誌のどれも、情報の提供を重視し、新しい作品、新しい動き、新しい研究動向を一々報道して、中国の日本文学研究者に必要な情報を提供しています。とくに、中国社会科学院の主催する「外国文学動態」と上海社会科学院情報研究所の主催する「外国文学報道」は、情報誌であるだけに、日本文学に関する新しい情報などをよく整理・分析して、丁寧にしかもすみやかに伝えています。「外国文学報道」は、「新作概要」という欄を設け、新しく出版された日本文学作品の内容を相当くわしく紹介し、そして外国文学の動きを報道するためにもかなりの紙面をあたえています。「外国文学動態」は、ある特定のテーマをめぐる、まとまった情報を提供することが特色です。たとえば、「外国文学動態」1981年1月号には「外国における日本現代文学の研究」が、1981年4月号には「日本戦後文学の紹介」が、1984年5月号には「日本女流作家山崎豊子の〈二つの祖国〉についての論争」が発表されています。

情報提供の事情をだいぶ改善した中国日本文学界では、多彩な展開ぶりを見せています。「源氏物語」、「万葉集」、「竹取物語」、「落窪物語」、「平家物語」などの古典名作や二葉亭四迷、島崎藤村、芥川竜之介、小林多喜二、泉鏡花、白樺派の諸作家などの近代作家あるいはその作品を研究するばかりではなく、それまで情報不足のため研究できなかった戦後の作家とその作品をもおおいに研究するようになりました。日本文学研究分野での空白がかなりうずめられたと思います。

そして、分散的に日本文学を紹介・研究するのは物足りないと思われ、より系統的に、よりまとまった形で日本文学を紹介・研究しようとする意欲がますます強くなってきて、外国文学出版社と上海訳文出版社は、二十世紀叢書という形で日本の近代ないし当代の文学を系統立てて翻訳・出版しています。沈陽春風文芸出版社は、1985年1月数十人の現役の日本文学研究者を

全国から沈陽へ招いて、「日本文学大系」（全35巻予定）の出版計画を討論し、1986年のうちにまず5巻を出版することに決定しました。これは一地方出版社としては大きすぎるプロジェクトかもしれませんが、しかし、沈陽春風出版社は、大きな赤字を出してもぜひ出版したいという意気込みで、その出版に着手しました。そして、いままでパツとしなかった日本文学研究者をPRする意味で、「日本文学大系」の訳者と解説の作者を写真入りで紹介することも決まりました。

こういう翻訳のプロジェクトに対して、一方、上海辞書出版社は中国日本文学研究者の編纂による「日本文学辞典」を、四川人民出版社は日本文学者四百人近くを収録する「世界文学辞典」を、江蘇人民出版社は「日本文学辞典」を出版しようとしています。そのいずれも1986年ないし1987年に刊行できると思います。さらに、中国日本文学研究者の編著による「日本文学史」や日本文学史を教えるためのテキストの出版も計画されています。

以上、プロ文革後の中国における日本文学研究の傾向について、おおざっぱに紹介させていただきましたが、もし、このつたない発表がいささかでもお役にたてればはなはださいわいに存じる次第です。

ご静聴ありがとうございました。

討議要旨

山崎陽子氏から、台湾の大学で日文系の仕事をしている者ですが、二つの事を伺いたいとして次のように質問があった。

一つは、日本文学の読者は、大学の先生のような人が主でしょうか、或いは一般の市民に読まれているということでしょうか、

また、翻訳で読まれている場合、プロ文革で多くの知識人達が失われたとのことですが、今翻訳などを行っている人々はどのような人々でしょうか、そしてたとえば中国と日本では表現の仕方が違っていて、たとえば、非常に大きな表現となったり、或いは俳句なども翻訳されているとのことですが、五

言絶句、七言絶句のような表現で訳されるのでしょうか、現在の翻訳は原作の意図をよく伝えるようなかなりなレベルに達しているというようにお感じでしょうか。

これに対し発表者から、私は以前新聞記者をしていた関係で、最近新聞社の依頼で調査をしました。それによると大学生のほか、一般の若い労働者にもたくさん読まれています。石川達三の『金環蝕』などずいぶん読まれているのに驚きました。もっともこれには映画の影響も大きいと思います。

また、翻訳については、たしかに名訳もありますが迷訳もあります。たとえば大和三山を非常に高い山のように表現したり、「高瀬舟」の高瀬川を洋々とした河と思って日本に来て見て驚くような事もあります。『雪国』の「^{くにぎかい}国境の長いトンネルを抜けると」を国境と誤解するおそれもあります。漢字は理解の助けにもなりますが落とし穴にもなります。初期には迷訳も避けられませんが、交流が深まれば急速に改善されますし、またそれらは翻訳の勉強の教材としても採り入れられています。

俳句の翻訳についても討論が行われています。中国語に訳す以上は中国風に訳すべきだという意見もあり、俳句として訳すべきだという意見もあります。

と答えがあった。

山口公和氏からは、自分は1981年に中国を訪れ書店を見て、日本文学がたくさん翻訳されており、谷崎の『鍵』も翻訳されているので、プロレタリア文学に偏っているという先入観を改めさせられたが、ここで名を挙げられた作家の中には久米正雄、尾崎紅葉など、日本では今はほとんど読まれていない作家まで含まれています。近く日本文学史が出版されるということでしたが、日本の「日本文学史」を紹介するものではなく、独自の立場から評価された日本文学史になるのでしょうか、と質問があり、

発表者から、久米正雄や尾崎紅葉についていえば、中国ではこれまで、このような作家は研究されず空白になっていたので、その空白を埋めるという

必要があります。今の日本の若い人々にあまり読まれていなくても、或る時代にこういう作家があり、こういう作品が読まれたということを研究する必要があります。日本で研究されている中国の作品の中には、私達中国人が今日あまり読んでいないものもありますが、だからそれは意味のない事だということにはならないと思います。またこれから出る日本文学史については私はくわしく知りませんので出版されるのを待ちたいと思いますと答えがあった。

長谷川泉氏から『源氏物語』の翻訳が出版されましたが、あれはどのような人々に読まれているのでしょうか、また中国で一時厨川白村が広く読まれた時期があったと思いますが今はどうでしょうか、と質問があり、

発表者から、『源氏物語』は非常に多くの部数が出版されましたがすぐ売り切れてしまいました。どうしてそんなに売れたか意外なのですが、おそらく中国の『紅樓夢』に相当する日本のロマンというので売れたのではないかと思います。厨川白村については私は不案内ですと答えがあった。

鈴木靖浩氏から『雪国』の駒子の恋愛は肯定的に論じられていますか、また日本と中国の自然の違いは翻訳に当って問題だということでしたが、その問題は実際どのように処理されていますか、と質問があり、

発表者から、恋愛というよりも、駒子の人柄を肯定的に論ずる意見もあり、自分も駒子は現代の「待つ女」という視点で論文を書いています。

また翻訳に当って誤解されやすい点については説明を加えるなど工夫がされていますが、今後もっと研究が積まれて好いものになるでしょうと答えがあった。